
虜囚

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虜囚

【Nコード】

N2921P

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

「お待ちください！シン様」

「放せ。一刻を争うのだ」

シンの臣下たるイチは主のまたがる馬のたずなを握り、放しはしない。

「お待ちください！シン様」

「放せ。一刻を争うのだ」

シンの臣下たるイチは主のまたがる馬のたずなを握り、放しはしない。

「いいえ。放しは致しません。このままドレットノース国へ単身乗り込んで、何ができましよう？むざむざシン様を犬死させる訳にはまいりません」

「出来る出来ぬの問題ではないのだ。ドレットノース国がコーリネ国に奇襲を仕掛け、一触即発の状態だ。戦争がいつ起きてもおかしくはない。戦争が起きればドレットノース国の虜囚になっているメネア姫の命はどうなるのだ。男にはやらねばならぬ時がある。それだけの話だ」

もはやシンにとって自身の命など惜しくはなかった。

ただ伸ばしたその手が相手に届かぬかもしれないという不安だけがある。

「ですが、コーリネ国にはアメストリ国、ドレットノース国にはチエルディカ国という大国が後ろ盾となっております。早々に戦争とはまいりませまい」

「しかし、ドレットノース国の同盟国であるはずのロマリー国は既にドレットノース国を見限り、奇襲に対して批判的な態度を取っている」

「チエルディカ国もロマリー国同様、ドレットノース国を見限ると言われるのですか？」

「ああ。一昔前なら確実にチエルディカ国はドレットノース国をかはい立てしただろう。だが、近年チエルディカ国は張り子とは言え、経済的に成長しつつある。実態を持たぬ今この時期に事を構えるのが得策ではないとチエルディカ国も分かっているだろう。恐らく先

だつての和平のための会談、各国を交えて開くと言う話も体裁だけだろ。だからこそ、コーリネ国とアメストリ国とが今も密談しているのだ」

イチはシンの言葉に深く頷く。

そして、

「シン様はお忘れですか？彼のチエルデイカ国が矜持の国だと」

「道を分かち合っていて、なお踏み外すというのか？」

「そうです。ちょうど今のシン様のよう」

言われて、シンは自分の心中を省みる。

「ならば、どうしろと？」

「虜囚の返還を和平の話し合いの場に出る事の交換条件に。外交のカードとして出すのです」

「コーネリ国の反感は固いな。人の血の味を知った大地がそう簡単に人心を放しはしないだろう」

「そうですね。コーリネ国も多くの虜囚がドレットノース国におり、その返還が仮に叶ったとしても、怒りの鋒を収めはしないでしよう。最悪、アメストリ国の不興をも買うやもしれません。ですが、我が国は他国との足並みをそろえながらも、我が国の主張をもしていかなくてはいけないのです」

「シッポを振ることしか能のない我らが暗愚の王にそれが出来るとお前は思うのか？」

「分かりませぬ。しかし、少なくともシン様一人が動かれるよりかはいくらかましかと」

シンは唸る。

そして、馬を下り、踵を返す。

その後にイチが続く。

「ええい。己が力の無さが忌々しい」

そう言つて、シンは唇をかむのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2921p/>

虜囚

2010年12月4日13時24分発行